

PART3 インタビュー

死んでよかった
というような命はない

おのじん
尾上浩二

ローリー「匿名」インタビューナショナル
日本共産党 副委員長



言葉に表わせないショック

——「やまゆり園」の事件は、これがアメリカだったら大統領がすぐさま声明を出したのではないかと思いました。

まさにそうですね。事件は世界的に衝撃を与えて、海外紙もトップニュースで扱っていました。アメリカ国家安全保障会議のプライス報道官は即座に声明を発表し、遺族への深い哀悼の意に加えて、「こうした暴力には、いかなる弁解の余地もない」と強い言葉で非難しました。日本で起きた事件に米政府が異例の緊張声明を出すほど、重大な事態であったということですよ。

しかし日本政府はメッセージを発することなく、真相究明と再発防止の段階へと向かってしまった。

——DPPー日本会議は、早くも事件の翌日に声明を出しました。「怒りと深い悲しみを込めて断固として優生思想と闘っていく」と。第一報の時点から動いていたのですか？

いいえ。未明に起きた事件のニュースを朝、目にしたときは、「こんでもないことが起きた！ 仲間がたくさん殺されている」と言葉に表わせないようなショックを受けて凍りつきました。事態がわからなかったのです、たとえば職場の怨恨によって自暴自棄になった職員の実行なのだろうか、などと思いをめぐらしたりしながら、とにかく混乱の中でした。

風過ぎ、容疑者が警察で「障害者はいなくなればいい」「意思疎通が困難な人を選んだ」といった供述をしているとの報道があり、事件の背景に優生思想があることをうかがわれました。命の価値に優劣をつける考え方に対して、はつきりと否定する声明が必要だと考えました。

午後には、容疑者に措置入院歴があることが報じられ、これを事件と結びつける構図が描かれていきました。この空気は、どのような声明にするのか慎重に判断しなければいけないと思います。

——「偏見と予断を煽りかねない報道は差し控えられることをあわせて求める」と声明文にありますね。

さらに、声明を作っているときに衆院議長への手紙が公開されました。

「障害者は不幸しか作り出さない存在」「車いすに縛り付けられているだけ」とい言葉に、井上は「自分の身を切られるような痛みと衝撃を感じました。ひとつには私自身、脳性まひの障害を持ち車いすで生活している者として、このように言われたことへの痛みです。」

もうひとつは、大学時代から障害者運動に関わってきた、今やつむへ、「障害者差別解消法」やバリアフリーが進んできたかというその矢先に、今まで積み重ねてきたものが一挙に崩されたような、打ちのめされる感覚でした。だからこそ声明に「今回の事件にひるむことなへ」と書いたのです。これは、無力感におそわれそうな自分たちへの呼びかけでもありました。

——アディクションの領域でも、多くの人がこの事件で衝撃を感じました。

事件そのものの重大性はもちろん、その扱われ方が、今後の社会をどの方向へもっていくかを左右すると思います。

「心がいわれそひです」

とても大きな問題なのは、容疑者による衆院議長への手紙が、きちんとした批判なしに、マスコミによって繰り返し流されたことです。テレビでも新聞でも、こんなひどいことを言っていますよといった雰囲気だけで、はつきりそれを否定するような「対抗できる言説」などで公開された。これは社会の中に「本音として、こういふことを言ってもいいんだ」という空気を生み出します。

こうした報道に触れた知的障害のある女性から「心がいわれそひです」というメールが来ました。本当に多くの障害者や、生きることに関わる様々な困難を抱えた人たちが、「心がいわれそひ」「なったのひはなごかと思ひます」。

もうひとつの問題は、事件に対する矮小化したとらえ方です。「精神障害がある特異な人間が」「平穩に暮らしていた知的障害者を」「大量に殺害した猟奇的な事件であるかのような……」。

——そうやって矮小化すれば、ひどいことが起きたね、というだけで、それ以上考えなくてすむわけですよね。

しかし実際は、容疑者の思想には社会的な背景がある。それに犠牲となった人たちは、必ずしも望んで入所施設に暮らしていたわけではありません。こつこつと切なくなってしまうのですが、そもそも一カ所に集まっていなければ、一九名も一度に虐殺されることなどあり得なかったのです。

犠牲となった方々それぞれが、やむを得ない状況、さまざまな家族の事情の中で、そこにいた。

施設から地域へという障害者運動の流れが生まれる以前、日本では障害者を収容するために山を切り拓いて大規模施設を作る政策を進めてきました。それが福祉だと考えられていたのです。

最近では新しく作られる施設は三〇〇五〇人規模のものが多いですが、津久井やゆめり園は一九六四年設立で一五〇人規模です。

障害者を社会から分離・隔離してきた歴史が、今回の事件の中に凝縮されているように感じます。

ナチスより身近な、日本の問題

——事件後、再発防止策がマスコミでもあれこれ論議されました。

今回の容疑者は、捕まることを前提に行動していて、実際に事件後に出頭しているわけです。そういう犯罪を防止しようとしたら、通報システムを強化したほうがいいですまないですかね。

その意味で、本気で再発防止をやるつもりとするべきになるか。

まず、「障害者施設の塙をどうと高くする」「こつこつになる。訪問者へのセキュリティを強化し、地域住民との交流もなげすむこと」になります。

一方で「危ないことをしそうな精神障害者は、精神病院から外に出すな」との偏見があおられ、隔離が進められるということになる。

つまりこれは図らずも、植松容疑者が描いたのと同じ「障害者のいない社会」に近づいてしまっている。

事件の衝撃が社会をどこに向かわせるか、一人一人が自分の立っている場所をしっかりと確かめて進んでいかないと、いつしか全体としてそちらの方へ

転がって行ってしまつたのです。

真の再発防止とは、こうした価値観を克服するところこそあると思います。

——植松容疑者のような価値観ですか。

容疑者個人にとどまらず、この考え方を生み出した社会状況を見る必要があります。

今回、障害者の大量虐殺という共通点からナチス時代の「T4作戦」が引き合いに出されることが多いですが、それだけでなくもっと身近に、日本社会の中に連綿と続いてきた問題があるのです。

高度経済成長時代に障害者殺しが多発しました。核家族化とコミュニティ崩壊によって家族のみに負担がのしかかったことが背景にあります。そうした中で、一九七〇年に横浜市で、母親による重度脳性まひ児の殺人事件が起きました。

この事件では母親に同情が集まり、減刑嘆願運動が行なわれました。さらに、子どもにとっても亡くなったほうが幸せだったのだ、ということまで言われた。

そんな減刑嘆願運動に対して障害当事者が声を抗議の声をあげました。母親の苦しみは苦しみとして、しかし一人の人間を殺した事実が変わりありません。障害者の命の価値は低いのか？

また、その人が幸福かどうか、生きるに値するかどうかを、外から決めてしまうことができるのか？

——加えて、もともと日本では「子どもは親の所有物」という考え方が根強い。

まさにそうです。一人一人が別の人間だという土台があいまいな中で、個性や多様性が認められにくい。さらにそこへ効率重視や能力主義が進んでいく。そのような社会の中で、「優生思想との決別」がないまま今に至っているのです。

日本では一九九六年まで、「優生上の見地から不良な子孫の出生を防止する」という優生保護法がありました。六六年から七〇年代中頃まで兵庫県では「不幸な子どもの生まれない県民運動」として、障害児を不幸と決めつけ出生を防止する行政主導の運動が進められました。

優生保護法が母体保護法へと変わっても、優生保護政策がどう間違っていたのか、とれだけの犠牲があったか、それをどう償い、今後どのような社会

を作っていくのか、という総括はなймаまです。

——ドイツではナチズムがはっきりと否定され、T4作戦にしてもドイツ精神医学会が組織的関与を認めて第三者による詳しい調査が行われました。

日本では、総括されないままなんとなく次へ進んでいく。そんな社会の中で繰り返して出てくるのが、政治家や知事などの「よい遺伝子と悪い遺伝子」といった発言に象徴される、優生思想なのです。

——しかも今回は、元施設職員による殺人でした。

必要なのは地域での「出会ひ」

容疑者のあの貧弱な障害者観はなぜなのか……。不幸しか作り出さない「車いすに縛り付けられて」というのは、障害者といったいどういふ出会ひ方をしたのだらうかという疑問をもちました。

たとえば私の知人で、身体障害と知的障害の重複重度障害のある女性がいいますが、地域で暮らしてラフティング（川下りのスポーツ）にもチャレンジしています。一見すると何も表現できないかと思われがちな人でも、目の輝きやちょっとした体の傾けぐあいで、喜んでいたり不快だったりを伝えていたりする。地域の中で一人の人間として出会えば、そういう経験があるはずなんです。

単に「障害者」やひびく「出会ひ」するのではなくて、気が合う部分もあるし、ときにイラッとくるところもある、そんな一人の人間との自然な出会ひです。やまゆりの園がどういふところではなく、集団処遇は「出会ひ」が起きにくいんですよね。利用者に対してスタッフの人数は限られ、全員をひとまとめに管理するしかなくなります。

容疑者は子ども時代も障害のある友人がいた、と報道されましたが、もしかしたらそれは「障害児のクラス」にいる障害児の〇〇君」にすぎなくて、個人として出会っていないのでは、と想像します。日本では教育の中でも、分離の政策が進められてきましたから。

——社会を変えていくには、

スローガンだけでは難しいですね。

「優生思想はいけませんよ」と言葉だけ言っても、それは建前に過ぎない。その奥に「社会の重荷」という「本音」がのぞいてしまう。

この考え方に對抗するには、具体的な出会いが必要なんです。リアルな存在として相手を認識できるだけの、出会いの経験です。

障害者に限らず、性的マイノリティをはじめとした少数者や、生きる上でさまざまな困難を抱える人たちも含めて、それぞれの違いを認め合える関係が大切なのだと思います。

——DPPでは「インクルーシブな社会づくり」を目標に掲げていますね。その意味は？

具体的には、障害のある人となない人が共に学び、共に暮らし、共に働いたり余暇を楽しんだりする、そうしたことが当たり前になる社会です。

インクルーシブを直訳すれば「包容する、包括的な」ですが、それはピンとこないところがあるので、そのままインクルーシブと言っています。誰もが排除されたり排除したりしない、分け隔てられることなく地域で共に生きる社会という意味がこもっています。

少数者や困難を抱えた人を地域社会からはじき出すのではなく、さまざまな特性を持った人たちが、地域で一緒に生きられる社会です(図)。

事件から二カ月たった九月二十六日、障害者や支援者など約三〇〇人が東京で追悼パレードを行いました。そのとき掲げられていたメッセージのひとつが「多様性こそ力だ」です。

一人一人違う存在としてありのままでもいられる、そういう多様性を大切にしていきたいですね。